

第10講座 古文

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

亀山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民に仰せて、水車を造らせられけり。多くの銭を給ひて、数日に営み出だして、掛けたりけるに、大方廻らざりければ、とかく直しけれども、終に廻らで、徒らに立てりけり。さて、宇治の里人を召して、こしらへさせられければ、やすらかにゆひて参らせたりけるが、思ふやうに廻りて、水を汲み入る事、めでたかりけり。

万にその道を知れる者は、やんごとなきものなり。

（兼好法師『徒然草』）

〔現代語訳〕

（後嵯峨上皇が）亀山離宮の御池に、大井川の水をお引きになろうとして、大井の土地の者にお言いつけになって、水車を造らせなされた。（上皇は）多くのお金をお与えになって、（土地の者は）数日かかって造り上げて、取りつけたのだが、いっこうにまわらなかつたので、いろいろ直してみたが、結局まわらなくて、□□立っていたそうだ。そこで、（上皇は、水車の名所である）宇治の里の者をお呼びになって、こしらえさせなされたところ、簡単に組み立ててさし上げたが、（今度は）思いどおりにまわって、水をくみ入れることは、みごとだったそうだ。何事につけてもその道に通じている者は、尊いものである。

問一 ——— 線①「大方廻らざりければ」とありますが、何が廻らないのですか。古文中から書き抜きなさい。

問二 □□にあてはまる、——— 線②「徒らに」の現代語訳として最も

適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア がんばようそうに

イ 何の役にもたたないで

ウ いたずらをされたままで

エ 奇妙なかつこうで

問三 ——— 線③・④を現代かなづかいに直して、すべてひらがなで書きなさい。

③

④

問四 ——— 線⑤「その道を知れる者」にあたる人物を古文中から書き抜きなさい。

問五 筆者の感想が書かれているのはどの部分ですか。古文中から一文で探し、その初めの五字を書き抜きなさい。

問六 この文章で筆者が最も述べたかったことは何ですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 亀山離宮の美しさ。

イ 宇治の里の者の器用さ。

ウ 専門家の尊さ。

エ 水車造りの苦労。

2 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

古文

信安のふやすといふものありけり。世の中に強盜がうだうはやりたりけるころ、もし家やさがさるる事もぞあるとて、強盜をすべらかさむ料れうに、日暮るれば、家の外に小竹を多く散らし置きて、つとめてはとりひそめけり。ある夜、家近く、焼亡ぜうまうのありけるに、あわてまどひて出づとて、その小竹にすべりて、まろびにけり。腰こしを打ち折りて、年としの寄りたれば、ゆゆしくわづらひて、日數経ひかずてぞかくしてよくなりける。いたく支度したくの勝れたるも、身に引きかづくこそをかしけれ。

（橘成季『古今著聞集』）

橘成季『古今著聞集』

〔現代語訳〕

信安という人がいた。世間に強盗ごうとうがはびこつていたころ、もしや（強盗に入られて）家さがしされる事があるかもしれないといつて、強盗をすべらせるために、日が暮れると、家の外に小竹を多く散らして置いて、翌朝はとりかたづけた。ある夜、家の近くで、火事があり、あわてふためいて外へ出て、その小竹にすべつて、転んでしまった。腰を打ち（骨を）折つて、 、ひどく苦しんで、日数がたつてやつとのことでよくなつた。あまりに用心して支度しすぎても、（逆に）^④我が身わがみにひつかぶるとはこつけないである。

問一——線①「家の外に小竹を多く散らし置きて」について、次の

- (1) 小竹を散らしたのはだれですか。古文中から書き抜きなさい。

小竹を散らしたのはだれですか。古文中から書き抜きなさい。

(2) どんな目的でこのようなことをしたのですか。古文の中から十字で書き抜きなさい。

問二 にあてはまる、――線②「年の寄りたれば」の現代語訳を

五字以上十字以内で書きなさい。

[illegible]

問三 線③「わづらひて」を現代かなづかいに直して書きなさい。

5
10

問四 線④「我が身にひつかぶる」とありますが、この話ではどの

記号で答えなさい。

- ア 信安の家が火事にあつたこと。
イ 火事にあつた信安が逃げおくれたこと。
ウ 信安が小竹ですべて転んだこと。
エ 信安の家に強盗が入つたこと。

イ 火事にあつた信安が逃げおくれたこと。

信安が小竹ですべて転んだこと。

工 信安の家に強盗が入ったこと。

問五 この話から得られる教訓として最も適當なものを次のうちから選

び、記号で答えなさい。

- ア いつでも十分な準備をしておくことが大切だ。
- イ 急いでいるときほど、落着かなくてはいけない。
- ウ 何事もやりすぎるのはよくない。
- エ しんぼうすることが肝心である。

イ 急いでいるときほど、落ち着かなくてはいけない。

ウ 何事もやりすぎるのはよくない。

工 しんぼうすることが肝心である。

練習問題

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔古文〕

きさらぎのほどより、よろづみな、冬のころつきて、空のいろうららかにけしきだちて、四方山もかすみこめたるよそほひ、ことに、あけぼののけしき、たとふべき物もなく、あはれむべし。いにしへの人、春は曙といひけんも、うべなるかな。日の光やぶしわかねば、かずならぬ垣根の内も、Aにかはりてかがやきいで、草木生ひて、みな、顔色を生じ、花まちがほになごやかなるけはひうれし。日かげも、やうやくのどかになりもてゆけば、人のわざも、ふるとしよりいとまあきありて、いそがはしからず。

〔現代語訳〕

二月のころから、すべてのものに、冬の様子がなくなり、空の色にもうらかな様子が現れ、四方の山もかすみがちこめたありさまで、特に、あけぼのの景色が、B、趣がある。昔の人が、春はあけぼの（がいい）と言ったのも、もっともだなあ。日の光がどんなに草深いやぶでもへだてなく照らすから、粗末な家の垣根の中も、Aに代わって輝き始め、草木もはえて、みな、生き生きとして、（人々も）花が咲くのを待つてなごやかな様子になるのはうれしいものだ。日の光も、しだいにのどかになってゆくので、人の営みも、Cよりもひまがあって、忙しそうではなくなる。

問一 — 線①「よろづみな、冬のころつきて」とありますが、人々の生活の変化について述べている部分を古文中から二十九字で探し、その初めと終わりの四字を書き抜きなさい。

--	--	--	--	--	--

問二 — 線②「あけぼの」とは、一日のうちのいつごろのことですか。最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 夜明け イ 昼さがり
ウ 夕暮れ エ 夜ふけ

--

問三 — Bにあてはまる、線③「たとふべき物もなく」の現代語訳として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア たとえて言えば イ はなやかで
ウ たとえようもなく エ 珍しく

--

問四 — Aにあてはまる季節名を漢字一字で書きなさい。

--

問五 — 線④「やうやく」を現代かなづかいに直して書きなさい。

--

問六 — Cにあてはまる、線⑤「ふるとし」の現代語訳として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 長年 イ 去年
ウ 毎年 エ 新年

--

問七 — 線⑥「いそがはしからず」の主語を古文中から書き抜きなさい。

--

問八 次の「会話文」は、Aさんのクラスで古文の内容について話し合ったときの会話の一部です。これを読んであとの(1)～(5)に答えなさい。

〔会話文〕

Aさん この文章は、旧暦きうれきの二月のころからの様子をえがいていますね。そのくらいの時期になると、空や山の様子が変化へんかするみたいです。

Bさん 空については、現代語訳では「a」が現れると言っていますね。山の様子は古文では何と言っていますか。

Cさん 四方の山に「b」と言っていますよ。「いにしへの人」が、「c」と言った言葉に対しても「もつともだなあ」と感じているみたいです。

Aさん 「c」は、平安時代へいあんの枕草子まくらぐさの一節ですよ。前に読んだことがあります。昔の人は現代の私たち以上に、季節きせうの変化を繊細せんさいに感じていたのですね。

Bさん 春になると、草花もさかんに成長せいしやうしてきて、それを見る人の様子も変わります。古文では「なごやかなるけはひうれし」と言っています。

Aさん 空や山の様子、日の光の変化、草花やそれを見る人々の思いなどを表現したこの文章では、「d」が主題しゆだいと考えていいでしょうね。

(1) 「a」にあてはまる言葉を現代語訳中から七字で書き抜きなさい。

(2) 「b」にあてはまる言葉を古文中から十一字で書き抜きなさい。

(3) 二つの「c」に共通してあてはまる言葉を古文中から三字で書き抜きなさい。

(4) 線部「なごやかなるけはひうれし」とありますが、人々が「なごやかなるけはひ」になる理由として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 日の光がのどかになって、人の営みも緩やかゆるやかになっていくから。

イ 草木がはえて、生き生きとしていて、花が咲くのが待ち遠しいから。

ウ 春になって、冬の寒さやひもじさに苦しむことがなくなるから。

エ 日の光が強くなって、家の中を明るく照らすようになるから。

(5) 「d」にあてはまる言葉として最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 自然しぜんの奥深さ イ 自然と人間とのふれ合い
ウ 古い時代へのあこがれ エ 新しい季節きせうの到来とうらいの喜び
